



田嶋 康利

労協連は、2月15、16日の両日に渡って「全国よい仕事研究交流集会2014」を開催、前日からの大雪の中、参加者は例年の半数にとどまったが、労協連30有余年の中でも歴史的画期をなす集会となった。この集会は、昨秋からの4つの分野別よい仕事集会（自立・就労支援社会化推進フォーラム、建物総合管理・コミュニティ施設よい仕事コンテスト、全国ケアワーカー集会、子ども・若者フォーラム）の開催を通して、当事者主体の協同労働による「よい仕事」の到達点と課題を以下のように整理し、総括的な集会として位置づけて開催したものである。

第一に、子どもや若者、高齢者、そして生きづらさや困難を抱える人びと、労協の仲間が、協同労働との関わりの中で、地域を支え、居場所と仕事をおこし、ありのままの存在を認め合える仲間との出会いや活躍の場を見出し、「主体者」へと成長していく姿が登場していること（この姿への出会いと共感）。第二に、当事者の「誰かに必要とされたい」「誰かの役に立ちたい」との思いから当事者自身が声をあげて、立ち上がる（支援されるのではなく自立する）—寄り添って支える対象者として見るのではなく、最も社会から排除され、働くことから排除されている痛みを知っている彼（彼女）らこそ、そのような働き方を変える変革者、社会を変える変革者、最も尊厳ある仕事をつくり出す当事者であること、と

して捉えること（人間観の転換）。第三に、あらためて私たちワーカーズコープは当事者組織であり、多くの困難に向き合い、社会的困難にある当事者を仲間として迎え入れる協同労働の取組みの社会的価値と意味を共有できたこと（試される職場の包摂力と創造（創造）力）。第四に、当事者（ニーズの共有者）こそが、地域に連帯の力を生み出し、社会を変える力をつくり出し、それは社会連帯のネットワーク、まちづくりの可能性と展望を切り拓いていくということ（まちづくりの主体者）。そして、第五に、全ての分野別集会が「よい仕事」を巡って、この共通の認識に立てたことが大きな成果であり、協同労働による当事者主体という運動・事業のあり方を、地域からどのように本格的につくり上げていくかが、今後の課題となった。

これらの到達点と課題を踏まえて開催した「全国集会」は、初日にワーカーズコープの4現場からの実践報告を受けて、パネルディスカッション「命の時間に寄り添って、居場所と仕事を地域で創る」を開催、NHK「老人漂流社会」を製作したチーフプロデューサーの板垣さん、「難民高校生」の著者で、一般社団法人「Colabo」代表の仁藤さん、京丹後市役所「くらしとしごとの寄り添い支援センター」の藤村さんより、高齢者や若者、生活困窮者が抱えている社会的問題とその課題解決についての問題提起をいただいた。続いて、映画ワーカーズ

を鑑賞いただき「協同労働はイノチをつなぐ働き方」と感想を評された作家の天童荒太さんと永戸労協連理事長との対談「命をつなぐ働き方～協同労働の社会的価値を語る」。これらを経て、危機と混迷を深める社会と時代の転換期にあって、人々が協同する(群れる)ことの意味、協同労働という働き方がなぜいまこの社会に求められているのか、パネリストや天童さんから語られ、大いに学ぶ機会となった。

2日目は12の会場に分かれて分科会を開催、全国から選出された60数本の実践レポートを基に報告・討議を行い、協同総研の会員研究者の方々にコメンテーターとして登場いただき、実践への評価と検討を行っていただいた。

「昨日は、第6分科会に出ましたが、大変興味深いものでした。単発的なビジネスから『コミュニティビジネス』さらに『地域づくり』へと拡張していること、若い人びとが果敢に取り組みは始めていること、地元の地域リーダー達が関心を持って労協の活動を評価し始めていること、などです。『よい仕事』が『よい地域づくり』になりつつあると言い換えてもよいでしょう。すぐれた『映画』の活用も功を奏したようです。関連して、『研究集会』の『研究』面はどうだったのか、ということが大事な点だと思います。例えば、発表事例の『成功要因』や『課題』等が、ある程度分析され

て提示される、あるいは、当日の論議の中で抽出されるなどです。これまで実際にはできなかったことですが、『研究集会』と名づけて、このような催しが開始された時には、そのような『意図』『期待』があったに違いないと思います。会の運営の方法によっては、幾らか可能になるかも知れません。ご検討ください。『若い人の地域での活躍』が、地域に与える影響は、計り知れないものがあります。これから大いに期待が持てる、集会になったと喜んでおります。会の成功に向けてご苦労されたセンターの皆様にご心から感謝します」との感想をコメンテーターとして登場いただいた千賀裕太郎先生(東京農工大学名誉教授、協同総研理事)よりいただいた。コメントに励まされると共に、今後私たち協同労働の当事者自身が「研究」というテーマに向かうことの必要性をあらためて考えさせられた。

私たちは引き続き、「よい仕事を高め、人間的に成長・発達する」-この働き方をめざす協同労働とその運動事業を地域に広げていくためにも、協同労働を社会的な力にしていくことが最も重要なテーマだと考えている。全国的・社会的な課題を押し上げるとともに、当事者主体に貫かれた協同労働による「よい仕事」「仕事おこし」を、生活と地域を焦点に全国各地に広げていきたいと思う。